

(一) 『東亜教育交流視野下的中日留学生史研究』 国際論壇（2017 年 5 月）参加記

川 崎 真 美（東京大学学術支援職員）

神奈川大学の中国人留学生史研究会は 1998 年からその活動をはじめ、20 年続いている研究グループである。同大の大里浩秋名誉教授と孫安石教授を中心として、「留学生」というキーワードに関心を寄せるものであれば誰でも参加のできる開かれた研究会である。筆者は 2006 年より定期的に参加しており、今回は同研究グループの多くが報告者として参加した大連で開かれたシンポジウムに同行する機会を得た。本稿はその記録である。

2017 年 5 月、アカシアが満開で緑豊かな季節を迎えた大連にて、『東亜教育交流視野下的中日留学生史研究』国際論壇が開催された。遼寧師範大学および神奈川大学主催のもと、5 月 20 日（土）に遼寧師範大学教育学院会議室にて、3 名の基調報告ならびに 11 名の研究報告がおこなわれた。参加者は報告者も含め 40 名程度あり、盛会となった。

1. シンポジウムの模様

配布されたプログラムは以下の通り。

[基調報告]

大里浩秋「対中国人日本留学史研究の回顧」

王晓秋「中日留学生史研究の学術史回顧」

田正平「教育史研究中的“神話”現象——以蔡元培和国立西南聯合大学為個案的考察」

[報告]

孫安石「広東省中国留学生有関檔案資料初探——為民国初期中心」

周棉等「近代中国留日学生筆下の留日生活——以《留東外史》為中心」

※周棉氏欠席のため、江蘇師範大学の学生が同大学の留学生研究の状況を簡潔に紹介。

周一川「近年来中国近代留日女学生研究概況」

呂順長「關於山本梅崖漢学塾の中国人留学生」※呂氏欠席のため未報告。

高田幸男「明治大学与中国留日学生」

斉紅深「在歷史之河里打撈——殖民教育口述史研究の回顧与展望」

見城悌治「戦時日本“満洲国”留学生の日本体験」

臧佩紅「范源廉の留日活動及其对中国近代教育の影響」

中村みどり「關於日本の“現代中国留学生文学”研究」

崔学森等「清末立憲の日本視角——以法学家清水澄為中心」

胡穎「以留学經費の視点探討清末留日学生」

楊曉「全面抗戰期間中国人留学日本の実態分析」

譚皓「殊途未必同歸——20 世紀 20 年代日本外務省留華学生の委托培養問題」



参加者による集合写真



会場の模様

以下、可能な範囲でシンポジウムの様子を振り返ることとする。

シンポジウムは、遼寧師範大学の陳大超教授司会のもと開幕が宣言され、岳崇興副学長の挨拶、朱寧波教育学院院長による教育学院の紹介がなされた。その後、記念撮影を経て、楊曉教授から報告者の紹介があり、基調報告が始まった（以下、報告者については役職・敬称などを省略する）。

基調報告のうち、大里浩秋、王晓秋は日中の留学生史研究を振り返るものであり、二つの報告を通して、現在の留学生史研究の状況を把握できる、シンポジウムの導入に相応しいものであった。

大里浩秋（「対中国日本留学史研究的回顧」）は、自身が留学生史研究に関心をもったきっかけ、日本における留学生史研究の先駆である実藤恵秀の研究、また神奈川大学の共同研究について報告した。まず、中国人日本留学史に携わるようになった契機は、学生時代に読んだ魯迅作品で、彼に日本留学経験があり、留学時期、帰国後の記録や経験に興味をもったのが始まりで、その後、陶成章らに関心を移し、日本の資料を研究に活用する必要性を感じたという。次に、実藤恵秀については、彼が日本人の中国人に対する蔑視を深刻に受け止め、満洲事変や日中戦争により日中関係の緊張が高まるなか中国人留学生が遭遇する困難を理解し、日華学会に出入りするようになり、留学生研究を進めるとともに、日中戦争の悲惨な状況を目の当たりにし、大量の留学生史研究の参考となる書籍を買い集めたことを紹介した。また、実藤執筆の『中国人日本留学史稿』および『中国人日本留学生史』という二冊の書籍を比較し、書かれた時期により内容が異なる点を指摘するとともに、二冊の重要性を説いた。最後にこの20年来の神奈川大学を中心とする日本の中国人留学生研究の進展について紹介した。

王晓秋（「中日留学生史研究的學術史回顧」）は、日中留学生史は日中文化教育交流史の重要なトピックであり、両国の歴史の発展過程や近現代の日中関係の変化に非常に影響しているため、両国の研究者のみならず国際学術界から注目されるのは当然であるとの指摘から始まった。続いて自身の研究を振り返り、留学生史研究と携わるようになった経緯を交え、先行研究を紹介した。王は1970年代に日中関係史の研究に取り組みはじめ、1981年の太平天国130周年国際討論会に参加し、日本の研究者との交流が始まり、実藤恵秀にも手紙を書き、教えを乞うたという。実藤からは共同研究を望まれたが、実現は叶わなかった。1980年代、90年代に日中留学生史研究は発展と高まりを見せ、多くの成果があった。南開大学の李喜所教授のグループが、全面的な中国留学史研究（アメリカ、ヨーロッパ、日本を含む）を中国大陆で最初に進め、北京大学も日中関係史、日中文化交流史の角度から研究を深化する段階に入り、研究対象がより精緻なものとなり、さまざまな時期、地域、性別、学科などの実証研究が進んだ。これは日本の神奈川大学の中国人留学生史研究会の功績が大きいとした。日中留学生史研究のもう一つの側面である日本人の中国留学研究はまだ手薄い状況にあるなか、譚皓の『近代対華官派留学史研究』などは意欲的な研究であり、今後日本人の中国留学史研究に期待したいと結んだ。

第三の基調報告である田正平（「教育史研究中的“神話”現象」）は、パワーポイントを駆使した報告で、教育史研究における「神話」現象をテーマに、「蔡元培」および「西南聯大」を事例として、

国民党・共産党，あるいは現状の教育に不満をもつ改革派と非改革派のいずれもが，象徴的なキーワードとして都合の良いように取り上げることを紹介し，どちらも一面的な見方であると断じた。新鮮な切り口の研究で，参加者の反応は大きかった。

続いて個別の報告を簡単に紹介していく。

孫安石は，早稲田大学図書館所蔵の実藤恵秀資料，清国留学生会報などの資料紹介を導入に，先行研究に触れつつ，広東省から派遣された中国人留学生に関する資料を，人数，入学先の学校などを具体的に提示しながら説明した。また，1920年代に広東省出身学生が「珠江読者会」を組織した動きを，その発足から頓挫するまでの過程を紹介し，広東省教育官僚の日本教育視察に関する日本側資料の存在にも言及した。

周一川は，2013年以降の中国近代留日女子学生の研究状況について，中国，日本，最新の研究動向の区分で細かに紹介した。また，日本の研究状況では，個人情報保護法の影響から，学籍簿など各大学が保存している資料に学外者がアクセスすることが難しくなった点や，資料面では各大学が取り組む留学生調査研究が優勢になっている点を指摘した。

高田幸男は，2010年に明治大学史資料センターで設立されたアジア留学生研究会の活動を具体的に示し，同大における中国人留学生の歴史変遷や，アジア留学生の特徴を提示した。また，周と同様に個人情報保護法による影響についても言及した。

斉紅深は，30年以上にわたる自身の研究について，日本との研究交流の経験を交えながら，教育史研究，植民地教育史，オーラルヒストリーと展開してきた経緯，また自身の研究成果を紹介した。

見城悌治は，『満州国留日学生会会報』を資料として用いて，「満州国留日学生会」がおこなった留学生に向けた「六大精神」を植え付ける活動といえる日本での「修練」を取り上げ，戦時下の日本における留生活動の一端を明らかにした。

臧佩紅は，中国の著名な教育者である范源廉を取り上げ，彼の日本留学時期の活動を考察し，帰国後に中国近代教育の発展に与えた影響について時期ごとに分析した。中国の小学校令や教科書などを日本のものと比較分析し，日本から取り入れた面が多くみられることを指摘した。

中村みどりは，日本における「現代中国留学生文学」の研究状況を，清末時期に来日した中国人作家を第一世代（魯迅，周作人），辛亥革命後に来日した作家を第二世代（創造社の作家）としてそれぞれの特徴を取り上げたほか，報告者が近年研究対象としている陶晶孫の日本留学の経験，その文学作品について紹介した。

崔学森は，清末の立憲には日本が密接に関係していたことを指摘し，なかでも日本の憲法・行政法学者である清水澄が，中国人留学生や日本視察員を通じて，講義や著作の翻訳といったかたちで，直接・間接的にも大きく影響を与えていたことを明らかにした。

胡穎は，留学生経費の視点から取り組んだ，清末の中国人日本留学生を考察した自身の博士論文の概要を，要点を絞って簡潔に紹介した。

楊曉は，『日華学報』の統計数字と東京大学の留学生関係文書を資料として1937年から1944年にかけての留日学生の実態について，人数の変遷など具体例を提示した分析をおこない，留学生の特徴及び留学生政策や制度の変化などを考察した。

譚皓は唯一日本から中国に派遣された留学生を対象とした。日本外務省が派遣した漢語留学生の変遷を紹介した上で，1920年代に外務省が漢語留学生の養成を上海東亜同文書院に委託した実態について明らかにした。また，ハルビン日露協会学校へのロシア語留学生の養成の委託についても比較考察した。

最後に，楊曉教授が本シンポジウムの総括をおこない，今後のシンポジウムの発展のため，①会議を定例化し，研究領域を東アジアに広げること，②事前にテーマを設定し，共同で問題に取り組み議論を活発にすること，③相互理解を深め，東アジア各国間の文化学術交流を促進すること，④シンポジウム

論文の水準を高め、肩書にこだわらず若手にチャンスを与えることを提案し、締めくくった。

2. 感想

各報告者は限られた時間ながら、テンポ良く発表をおこない、司会者は報告ごとに会場から質問がないか呼びかけるなど、参加者にも配慮がなされていた。

中国側参加者の報告は練りに練られたものが多く、新しい切り口や従来焦点の当てられることのなかった人物が取り上げられ、日本側参加者に新鮮な驚きをもって受け止められるなど反応が大きかった。日本側参加者の報告は、自己紹介のようにそれぞれがこれまで取り組んできた研究発表が多く見られた。留学生史に限らず、蓄積の多い日本の中国研究は発信力にまだ課題があることはよく知られている。そのため、留学生史研究会メンバーがまとまって中国で発信していくことは非常に意義があり、この経験が積み重ねとなって、今後の研究の進展、日中双方の研究交流の深化に貢献していくことを実感した。

3. エクスカーション

翌 21 日（日）はエクスカーションとして旅順をめぐった。この季節しか見られない道路に養蜂箱が並ぶ様子を眺めつつ、大連郊外の旅順にバスで向かった。日露戦争の激戦地であった 203 高地、旅順万忠墓記念館、旅順博物館、白玉山などを訪れ、歴史を感じる時間となった。さながら「大人の修学旅行」とも呼べる一日で、充実した時間を過ごすことができた。



203 高地



旅順博物館



白玉山塔から見る旅順港

〔付記〕本シンポジウムを企画された遼寧師範大学関係者、孫安石先生をはじめとする中国人留学生史研究会の皆さまに深く感謝いたします。本稿は科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）による研究成果の一部です。